京都外科集談会

昭和29年12月例会

(1) 整形外科領域に於けるアミピロの使用経験

広谷速人

本学の荻生教授・高橋教授ら (1952) に依つて合成されたPyrazolon系化合物Aminopropylonは，Aminopyrinに比し毒力弱く鎮痛作用が強いのみならず，その水溶液はAminopyrinの溶解度を増す．

両者の等モル濃度液たるアミピロ注射液を48例の外来患者に使用したが，その内33例(約69%)に種々なる程度の鎮痛効果を認め，比較的速効的であつた．

本剤による好酸球減少度を5名の同僚の協力の下に調べた所では，本剤と副腎皮質との間に直接的な関係を見出し得なかつた．

副作用としては，一過性の眩暈を来した1例の外全身的なものは経験せず，局所的には腫脹，圧痛を訴えた2例（上膊筋肉注射）と臀部皮下脂肪へ注入されたと考えられる1例を見た．注射時の疼痛は，注射時間を考慮する必要はない程軽微なものであつた．

質問　高山文三

手術後の創の痛みにも効果がありますか．高山が試用してみた結果では余り効果が無いようであつた．

答　広谷速人

術後疼痛には用いて居りません．

(2) 静脈瓣の造設

佃　光雄

私達は最近，下腿静脈瘤の患者で，大伏在静脈に瓣を造設する経験を得ました．

17才の機械修理工で，左下腿の内側から前面にかけて蛇行状の静脈瘤があり，Trendelenburg氏試験は単純陽性でした．

手術方法は大腿の中⅓で大伏在静脈を出して，3cm即ち直径の3倍の静脈を中心側に重積して瓣を作りました．

術後20日目の現在まで静脈瘤は全く現われず，治療の目的は達せられてをりますが，静脈撮影を行いますと，瓣造設部を中心にして約25cmの間に閉塞性血栓を作つてをり，瓣の造設は不成功に終りました．血栓形成に対して文献的考察を致しました．

(3) 脊椎過敏症の統計的観察

福田敏雄

昭和25年1月より昭和27年1月に至る約2ヶ年間に京大整形外来を訪れた脊椎過敏症患者200例について，主に脊椎カリエスとの比較を中心として統計的観察を加え，この両者は好発年令，臨床像においてよく似た傾向を示すが，詳細に観察すればそい好発部位においても，臨床症状においても明らかに相違することを見出し，脊椎過敏症は脊椎カリエスとは全然別個の疾患にして，脊椎骨自体に病変を見出さず，たゞ棘突起に疼痛があるという点を取り上げての一つの症候群として理解するのが最も妥当であるとの考えに到達した．

質問　大塚哲也

1. 脊椎過敏症の硬直性の範囲はどの程度に出るか．
2. 硬直性は前屈時と後仰時とどちらの方が強いか．
3. 苦痛は何時頃消失するか．
4. 治療上特別療法を試みているが，早期炎症消失例としている中に患者は次々と医師をかえている事も考えられるか．

答　福田敏雄

1. 強直性は比較的多数椎に及ぶ傾向があり，その程度は軽度のものが多い．（脊椎カリエスに較べて）
2. 治療としてはヴィタミンB_1注射，ノボカイン局所注射等を行つているが，症例の大部分は1回の受診治療のみで，後来院せず，数回の受診治療を行うものは1割にも満たないため治療効果の判定は困難であるが，脊椎カリエスに較べてその予後は良好なものと思われる．
3. 本演題の脊椎結核部位の統計は山田助教授によるものである．

質問　藤田栄隆

脊椎過敏症が胸椎に多いのに反し脊椎結核が腰椎下部に多いという演者の御意見は在来の統計にいわれている脊椎結核の好発部位（成人の場合胸椎下部及腰椎上部）と較べてあまりに胸椎結核の方が少なすぎるような感じを与えるが如何．

追加　広谷速人

私が15%のイルガピリンを使用した経験では，三棘突起に圧打痛あり強直性もそれを含めた五胸椎に証明した症例では8本の連続投与の後夜間一棘突起にのみ軽度の鈍痛を訴えるだけになつた．治療期間はこの位ではないかと考える．

(4) 興味ある臨床像を示した淋巴肉腫症と考えられる1例

花房節哉

本症例は，右耳下腺部に耳介をも包含せる小児頭大，左耳下腺部に拇指頭大，右鼠径部に手拳大の無痛性腫瘤を生じ，臨床的及び組織学的に淋巴肉腫症と考えられた例である．

特異なる点として(1)此等腫瘤が只3ヶ所に限局している．(2)本例に見られる様に略々孤在性に発生した巨大なる腫瘤形成は稀である．(3)腫瘤上の潰瘍部表面肉芽組織は一般悪性腫瘍のそれに比し，正常肉芽組織と思われる程であつた．(4)治療面に於て，ナイトロミン

に全然反応せず，X線照射に対しては驚く程の反応を示した．以上の点が挙げられる．尚耳下腺部腫瘤は，26回，全線量 5200r で約 1/12 に縮小した．

(5)　興味ある経過を呈せる皮膚淋巴肉腫症の1例

林　敏彦

軀幹左上腕及び右大腿の皮膚に原発した淋巴肉腫症に初期ナイトロミン1日50mg 計 1,000mg を投与して，急速にして完全な腫瘤の消失を来さしめたが，又同時に流血中の白血球殊に淋巴球の急激な減少を来し，ナイトロミンの中止と共に再び急速な腫瘤の増大転移を生じ，淋巴球数も投与前にもどつたが，中性球の回復は殆んど遅々たる中に，後腹膜其の他の全身転移を生じて遂に死亡した1例を報告した．而して皮膚淋巴肉腫症は私の調査範囲では本邦では4例という稀なものであり，且つ本例は初期の局所処見は粉瘤の如き良性の形を呈して居た．而してナイトロミンにより淋巴球数の急激な減少を来したのは，此が実に淋巴組織に生じた腫瘤である点が，細網肉腫と共に特異な現象を呈した理由であろうと，他の文献例をもあげて論証した．

(6)　興味ある臨床所見を呈した滑平筋腫の2例

手島宰三・荻原一輝・広谷速人

最近経験した滑平筋腫の2例につき報告した．第1例は廻盲部の無痛性皮下腫瘤とレ線像に於ける腰椎カリエスの所見及び小骨盤腔の石灰化腫瘤を綜合し，腰椎カリエス兼流注膿瘍右灰化と診断したが，術後の所見より，廻盲部腫瘤の腹壁筋の慢性炎症瘢痕（虫垂炎の波及？），石灰化腫瘤は後腹膜腔滑平筋腫の石灰化であつた．第2例の頸部，肘部及び全身皮膚腫瘤を結核性淋巴腺炎と，粉瘤及び乳嘴腫と診断したが，術後の検索に依り，前者は皮下線維素性滑平筋腫，後者は血管腫性滑平筋性線維腫なることを確めた．

(7)　多発性骨転移を来せる乳癌の1例

細野幸吾

43才の主婦の多発性骨転移を来せる乳癌患者に逆行性乳房切断術を施行し，その後総計 2,000mg の Testosterone を使用したが効果の見られなかつた1例を報告した．

追加　石上浩一

従来骨破壊性骨転移の時は血清アルカリ性フオスフアターゼ値の上昇を来たすことは稀といわれている．この症例はこの例外である．

(8)　頭部滑平筋肉腫の1例

（附：剔出後の広汎なる全層植皮の経験）

尾形誠宏

63才の男子，左頭頂部腫瘤を主訴として来院，腫瘤は約リンゴ大，半球状で，其の表面は一見他と同様の頭皮を以て覆れ，表面粗隆起状，境界不鮮明，弾性硬，被覆頭皮及び底部と密に癒着して動かず，軽度の圧痛を訴える．尚項部に3ケの無痛性淋巴節腫脹を伴つている．頭部皮膚癌の疑いのもとに腫瘤を健康な頭皮を含めて頭蓋骨と共に一塊として剔出した．此の際腫瘤は骨と癒着せるのみで，硬脳膜には異常を認めなかつた．組織学的に此の腫瘍は頭皮より発生した極めて稀な滑平筋肉腫 Leiomyosarcoma なることを確め得た．剔出後の欠損部に対し，硬脳膜上に直径 12cm 略々円形の Krause 氏全層植皮を行い成功したので，こゝに報告し若干の考察を加えた．

追加　大谷　碧

桐田と共に犬を用い，全層皮膚移植を行い，その植皮片或は移植床に墨汁を塗り又墨汁環流を行い，墨の行方を追求すると，全層皮膚移植の植皮片の初期栄養には脈管外通液路が関係するが又植皮片と移植床との接着良好なる部位には24時間後にすでに血管の連絡を認めている．全層皮膚移植の成功のためには，移植床にリンパの環流の良好な結合織を選ぶこと，移植床はいたずらに傷つけずに平滑な事が大切である．

(9)　多発性進行性化骨性筋炎と思われる1例

妹尾　覚・西野忠之

2才2ケ月台，背腰部の諸所の筋肉に次々と突然に無痛性の腫脹を生じ，炎症々状はなく，該腫脹は間もなく消失して骨性硬～軟骨性硬の突出と変り，運動障害を残し，臨床的には典型的な所謂多発性進行性化骨性筋炎の徴候と経過をとつた1例を経験した．本症は指趾の畸形を伴う事が多いといわれ，本症例に於ても両側外飜趾を認めた．腫脹発生2週間後の組織像では，早期のためか石灰化像は認められなかつた為に組織学的には診断に困難を感じたが，腫脹発生3ケ月後のX線像に於て初めて石灰化像を認められた．併しX線像で石灰化を認められた部の試験切片は，母親の同意を得られないので採取出来ない為，組織学的には追求し得られなかつた．

追加　石上浩一

化骨現象は血液中の燐酸エステルがフオスフアターゼで分解され，燐酸イオンの局所過剰状態がおこり，Caイオンの存在と，生体独特の所謂 Second mechanism が加つて起るといわれる．本症の時には血液中の Ca 濃度は正常であり，化骨が筋間結合織，筋膜，靱帯のみに起り，筋線維自体には起らないということは，筋組織自体にはフオスフアターゼ含量が極めて少いか，又は皆無であると報告されている点より興味がある．

追加　赤尾義彦

化骨現象とフオスフアターゼの関係を論ずる場合，フオスフアターゼ作用が関与する蛋白合成とそこに石灰塩が沈着するメカニスムスとは全く別の相と考えるべきだと思う．

したがつて化骨性筋炎と申す場合これは一種の退行変性としての現象であつて所謂化骨現象の第一段階にあらわれるフォスファターゼの存在を必ずしも必要としないのではないかと考える.

追加 妹尾 覚

本症は筋膜, 腱膜, 腱, 靱帯等より発生して筋肉は2次的に筋萎縮を来すもので, 後藤教授のいわれる如く Hyperplasia fascialis ossificans progressiva といわれるものと考える.

(10) 泉熱に依る廻腸末端炎の1例

牧 安孝

一開業医から急性虫垂炎として送られた患者を開腹して所見を得, 術後更に詳細な病歴を聞く事に依つて泉熱に依る廻腸末端炎と診所した1例を経験した.

廻腸末端の変化が最も強度であつたが虫垂にも明かに炎症性変化を認めた.

症状は急性虫垂炎に酷似し, 診断は困難な場合が多いが, acute abdomen の診断に当つて一応本症を念頭に置くべきである.

(11) 全身熱傷の2例と熱傷死の統計

中村正男

最近全身熱傷の2症例を経験した. 1例は治癒し, 1例は5時間後に死亡した. 治癒例では48時間を界として危険状態が去り, 約4ヶ月で全治したが, 半年後に胃潰瘍症状を訴え, 4年後の今日では軽度ながら胃腸症状, 循環器症状及び皮膚機能の低下を認める.

全身熱傷で血管壁に変化を生じ静脈内注射継続が不可能時には経肛的輸液を考慮すべきである. 又広範囲の熱傷面には巻軸包帯より紐附綿帯を用いる方が便利である.

京都大学外科学教室過去23年間の熱傷死例15名の統計的観察を行つたが, それによると全身熱傷の後 Shock 死を来したのは50時間迄で熱傷面積は20%以上であつた.

晩期死の原因は敗血症か肺炎を起したためであり熱傷面積は20%以下であつた.

(12) メツケル氏憩室を有する総腸間膜症の1例

重永正之

症例は32才の女子で廻盲部の膨満感と無痛性腫瘤を主訴とし約2ヶ月前から時々上記の症状を来す様になつたがガス排出及び排便により軽快する. 生来便秘勝ちで便通は4,5日に1回あるのみ. 尚5年前急性虫垂炎にて虫垂切除をうけている. 入院時所見として廻盲部に手術性瘢痕あり触診すると同部に上下に走る索状物を触れ移動性大なり. ローゼンシュタイン氏逆症状陽性. 移動性盲腸の診断の下に開腹すると腸管癒着なく, 盲腸及び上行結腸の大部分が小腸と共通の腸間膜を有する総腸間膜症であつた. 更に廻腸末端より約50cm口側の廻腸に長さ約3cm太さ約1.5cm のメツケル氏憩室あり. 憩室切除, 盲腸皺壁成形術及び盲腸上行結腸固定術を行つた. 術後経過は良好で術前症状は全く消失し, 便通も1日1行ある様になつた. 尚本邦症例83例を蒐めて本症に対する若干の考察を加えた.

(13) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける骨関節結核症(結核性脊椎炎を除く)に対する病巣廓清術の統計的観察

大塚哲也・中脇正美・山田 栄
山本忠治・香川 徹・玉重 亨
林 瑞庭・坪倉 健

本院で5ヶ年間に病巣廓清術を施行した骨, 関節結核患者98名109骨, 関節に就いて遠隔成績を調査し次の結果を得た. 性別では男性に, 左, 右別では右側に稍々多く, 又年令的には若年者に多い. 局所々見では術前自発痛, 叩打痛, 圧痛, 膿瘍, 瘻孔を有するものも術後, 殆んど消失し, 赤沈後の術前促進の傾向も, 術後改善された. 尚膿瘍, 瘻孔を残したものはマイシン未使用例である. X線像上, 骨萎縮, 骨破壊, 腐骨, 膿瘍像を認めたものも術後よく改善されている.

但し, 股, 膝関節では10才未満の年少者に骨性癒合が起らず脱臼を認めたものがある. 特に股関節では, 内転位をとり, 2次的に転子下骨切術を施行せねばならぬ例がある. 手術成績は略々満足すべき結果を得ているが, 特にマイシン使用例に於いて, 結果が良好である事は注目に値すべきものである. 部位別ではやはり関節構造の複雑な場所, 或は侵襲を充分加え難い部位程成績が劣る様である. 経年数による成績は年数を経るに従い向上している. 職業復帰状況も良好であるが, 現今の社会状勢で充分就業能力があるにも拘わらず就業出来ない者がある. 以上より統計的にみてマイシン使用病巣廓清術は推奨に値すべきものと考える.

(14) 鼓腸を主症状とせる自家中毒症に対し腸瘻造設により救命し得た1例

山崎雄弘

自家中毒症は一般に予後良好なる疾患といわれているが, 時に鼓腸を主症状とすることがあり, かゝる場合は重症で且つ予後不良のことが多い. 我々は最近2才5ヶ月の男児にて鼓腸を主症状とせる自家中毒症のため, 本院小児科に入院し, 抗生物質, 解毒強心, 腸蠕動亢進療法をなすも効無く, 腹部強度膨満し, 嘔吐続き自然排気排便無く, 全身状態悪化し死に瀕していた時, この鼓腸に対して発病8日目(小児科入院4日目)右側腹部にて廻腸と思われる腸管に対して腸瘻を造設した所, 術後一昼夜を経過して突然腸瘻より大量のガス及腸内容噴出し, 且つ肛門よりも大量の腸内容噴出し2分間位で鼓腸全く消失し, 以後自然排気排便をもたらし全身状態亦頓に好転するに至つた1例を経験した. 而してこの腸瘻は何等手術的処置を加えることなく約1ヶ月半で閉鎖治癒した. 自家中毒症の際に如何なる機転で鼓腸が起るかについては現今の所明確なる

説明を見出し得ないが，腸瘻造設術は汎発性腹膜炎，腸閉塞症で高度の腸麻痺を来した際，時に救命的に用いられてその蠕動亢進効果は顕著であり，又手術的侵襲は軽微であるから，本例の如く小児科的に治療をなすも効無き場合，小児科医と協力して是非施すべき治療法と考える．

追加　木村忠司

蠕動を亢進せしめるという方法に2つある．

1. つは麻痺に対して蠕動亢進剤としてVagostigmin, Imidalin 等を用いること．

2. 痙攣がある場所に起つているとやはり一般には腸の動きが悪くなるからこの際には却つて，鎮痙剤を用い即ち Atropin や Papaverin で以て Spasmus を除くと全体の蠕動が正常に戻る．即ち結果として蠕動を亢進せしめることになる．

それ故1.の方法で蠕動亢進を期待されなかつた場合には2の方法を一応試みるべきである．

(15)　両側先天性橈尺骨癒着症の1例

服部　奨・大谷　碧・土尾良之

1才11ヶ月の男子の両側先天性橈尺骨中枢端癒着症の1例を経験し，成因，病理，治療法に就いて考察を加えた．本症は極めて稀な畸形で，報告例は200例にみたず，我々の調査では本邦においては21例目である．

我々の例においては，機能障碍の少い右側はそのまゝ放置したが，機能障碍の高度である左側に対して癒着部の離断を試み，術後左側の機能障碍は右側と略々同程度まで軽快したが，今後長期に亘り後療法を行えば，より良好な結果を得る望みがあるものと考える．廻内位著しく機能障碍の高度であるものには手術療法が必要で，可及的筋其の他軟部組織の変化の少い，且つ適応力に富む幼児において行うならば，ある程度の効果を望むことが出来ると思われる．

(16)　下痢を伴える虫垂炎の経験例

杉本雄三・蔡　東隆・吉岡俊一

下痢を伴える虫垂炎の2例を報告し，若干の考察を加えてみた．要約すれば

①　2例とも下痢を伴つているが，自他覚的に虫垂炎の症状を揃えて居り，白血球増加もあつたので即時開腹した．

②　剔出せる虫垂は肉眼的には Appendicitis catarrhalis と思われる程度のもので組織学的には何れも明瞭な炎症性像を認めた．

③　腹腔内に1例は腹水の貯溜があり，又2例とも廻盲部腸間膜淋巴腺腫脹を認めた．

④　発生に関しては，虫垂独自のものとして考えるよりは腸炎乃至は腸カタルの炎症の波及による2次的な反応と考えるか，或は一元的に下痢と虫垂炎を招来したアレルギー性反応による炎症性変化と考えたい．

⑤　この2例の如き虫垂炎が果して如何なる運命を辿るかは即断出来ないが出来るだけ大きく開いて充分精査する必要があると思う．

追加　木村忠司

只今の結論は実に示唆に富む有益なものと思う．

外国でも同様な考え方があり，Enteritis の1部として来た Appendix の変化は厳密な意味の Appendicitis ではないかも知れぬ．斯様な際に Appendix を取り去つても良い結果が得られぬという報告があるが実際，術後性及び腹部神経症なども虫垂の変化が少かつたものに起つて来ることが多い．此の点を吟味する必要がある．例えば腸の1部から標本を作つて虫垂のみならず同様な変化が他の部にも存在することをしらべるなどはどうであろうか．

(17)　トリプシンの使用経験

牧　　安孝

国産トリプシンを種々の感染創に用いて好成績を収めたので，代表的な例を挙げてその使用経験を報告した．

トリプシンは壊死組織を溶解し，肉芽面を清浄化する作用に依つて特に急性壊疽性潰瘍に適応を選べば可成り画期的な効果が期待出来る．

特記すべき副作用は認められなかつたが長期の連用は肉芽を出血性にし，過剰肉芽を生じて治癒を遷延せしめる恐れがあるから軟膏療法への切り替えの時期について充分考慮すべきである．

又癌患者の血清中には抗トリプシン因子が非常に高まつて居るとされて居るが吾々の例では癌患者の褥瘡にトリプシンが著効を示した．

昭和30年1月例会

(1)　帰朝談

本庄一夫 助教授

(2)　2年間継続した吃逆（高度空気嚥下症合併）に対する手術治験例

中村和夫

27才の女子で，空気嚥下を伴つて約2年間継続した吃逆に対し左横隔膜神経捻除術と部分的胃切除を行つて之を停止させることが出来た症例を報告する．術前，吃逆は毎分10回位でレ線透視上左横隔膜の痙攣性収縮を認め，之に伴つて空気を嚥下し，此の為胃は著明に膨大しているのを認めた．臨床検査で胃液高酸症と自律神経機能に異常を認め，又精神神経学的に軽度のヒステリー性性格を認めた．左横隔膜神経捻除術を行つた所吃逆は著減したが消失せず更に部分的胃切除術（胃の4分の3切除 B.Ⅱ法）を行つて之を完全に停止さすことが出来た．併し空気嚥下症は之らの手術後

著減はしたけれども尚食道中部迄残存しているのを認めている．此の症例では吃逆と空気嚥下症が悪循環を形成した為に吃逆が難治性であつたものと考察し更に諸種の点から，吃逆は空気嚥下症の基盤の上に発生したものであろうと推論する．尚現在残存している空気嚥下症に対してはその治療を検討中である．

質問　杉本雄三

私も最近頑固な吃逆を経験しましたがX線透視で空気嚥下症があり，横隔膜神経切除をし暫く経過良好でしたが再発致しました．そこで内科的に胃に対する治療をした処，著しく効果がありました．即ち吃逆の原因は胃の膨隆という事にあるのでないでしようか．又此の患者は発作時非常に憂鬱であつたものが，軽快した後は非常に明朗となりました．発作がなくなつたから明朗になつたのか，明朗になつた事が発作を軽減せしめたのか非常に興味ある事だと思います．

追加　荒木教授

胃切除の際の小網切除の時に小網を器械的に刺戟して吃逆の起つた例があり，演者の例で胃切除が有効だつた原因には小網を切つたことをも考慮する必要があろう．

中枢神経性吃逆についてはさきに教室の江本の報告がある．

追加　景山直樹

最近教室であるいは Appendicitisから起つたのではないかと思われた強いSinglutusを来した例がありました．Prostata の Operation の後でも屢々強い Singlutus の起る例が報告されていますので，胃，脳等以外に下腹部からの Reflex に依つて起る例もあるのではないかと考えます．

追加　麻田栄

本患者は 1) 術前ピロカルピンテスト(卅)であつたが，術後殆んど正常となつたこと．而るに術後のピロカルピンテストに際し，これを注射後3回の吃逆を発生したこと．

2) 横隔膜神経捻除時，同時に N. vagus に対して 2% Novocain 遮断をも併せ行い，その後3日間ばかり吃逆が著減したこと．

以上より本例の吃逆が N. vagus に対する Reiz と何らかの関係があるのではないか．

追加　頑固なる吃逆を伴える患者の2例　中山剛

第1例：1ヶ年前下腹部の「イレウス」で手術を受け術後24時間前後持続する患者に対し「ルミナール」「オピスコ」の注射は奏功せず此の患者に対して「ラボナール」の静注麻酔を行うと直ちに吃逆は停止する例を経験した．これより吃逆は局所性原因の外に中枢性の因子も加わるものと思われた．

第2例：1年前より急性脊髄炎にて下肢麻痺を来すと共に右側胸部の激痛を伴う頑固なる吃逆を訴える患者に対し，右の横隔膜神経捻除術を施行し，術後1週間は平静であつたが1週間後再び以前と同様なる激痛を伴う吃逆を再発し此の患者に対し第5～8脊髄後根を切除したる所後痛は消失したが尚極めて軽いが吃逆を残した例を経験した．

(3) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける骨，関節結核の観血的治療前後に於ける肝臓機能に就いて．

山本忠治・香川徹・玉重亨

我々は結核性脊椎炎患者4例，骨，関節結核患者（結核性脊椎炎を除く）7例，両者を併発した患者2例に就いて術前，術後の肝臓機能を即ち 1) コバルト反応，2) 馬尿酸合成試験，3) 尿ウロビリノーゲンの3検査に就いて検討した．

以上を総括してみると，各疾病共術前何れも肝機能障碍が証明されるが，両者の合併例に於いて最も顕著である．而して障碍は術後第2～第3週の間に最高に達し，術後2～3ヶ月で一応正常値に復するが，一般に術前の障碍度の強いもの程その恢復が遅延する様に思われる．

(4) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける骨，関節結核の観血的治療後の肝臓機能よりみた遠隔成績に就いて．

山本忠治・香川徹・玉重亨

我々は結核性脊椎炎患者27名，骨，関節結核患者（結核性脊椎炎を除く）44名に就いて，肝臓機能の見地よりその遠隔成績を調査した．検査種類は 1) コバルト反応，2) 馬尿酸合成試験，3) 尿ウロビリノーゲンの3検査法である．結核性脊椎炎は術後経年数4ヶ月～3年9ヶ月迄のもの，骨，関節結核は術後経年数1年～3年10ヶ月迄のものを調査した．

2検査以上陽性例を肝機能障碍とすると前者は約1/3が障碍され，後者は約2/5障碍されている．一般に結核性脊椎炎の例では概ね症状と肝機能成績とが一致しているが，骨，関節結核では所謂術後，症状鎮静期にあるものでも肝機能の低下を認めるものが多い．

(5) 結核性腹膜炎と誤られた Pseudomyxoma peritonei

辻　健郎

(6) 骨髄炎瘻孔に発生した皮膚癌の1例

山本忠治

骨髄炎瘻孔から発生した癌腫の報告は稀なものであるが，46才の女子に原発性に発生した扁平上皮癌の1例を報告した．本例は発病後34年間の経過を経て発生したもので Reichel の説に一致して転移も無く予後の良好なもので腫瘍部の徹底的切除と慢性炎症の根本的手術とを同時に行い，術後の皮膚欠損部には植皮術を施行し良好な成績を治めた．

(7) 顔面部に発生した V. Recklinghausen 氏病の2例

長崎寿志・大谷圭三

我々は最近顔面部に限局して発生したレックリングハウゼン氏病の2例を経験した．

症例1：13才，女子．顔面の右半部高度に膨隆し奇怪なる顔貌を呈す．右眼窩部では鶏卵大以下の弾性硬，軽度の圧痛を有する大小の腫瘤を認め，その他の部では瀰蔓性象皮病様肥厚を示す．全身皮膚に多数の褐色斑あるも結節を認めず．レ線上，頭蓋骨欠損，眼窩拡大，及びトルコ鞍軽度拡大を認む．

症例2：12才，女子．右下顎角部より頤部にかけて瀰蔓性に膨隆，その皮膚面に2個の褐色斑を認め，皮下に鳩卵大弾性硬なる腫瘤1個を触知す．その他全身皮膚に色素斑或は結節を認めず．

両症例共に遺伝関係なく，内分泌異常を認めず．組織学的には前者は線維腫で，後者は蔓状神経腫であつた．

(8)　胃切除時十二指腸断端閉鎖困難なりし症例の経験

杉本雄三・蔡東隆

最近経験した十二指腸断端閉鎖困難な2症例を報告し，京大外科第2講座のデータなどを参照して種々教えられる処があつた．

第1例は十二指腸潰瘍にて曠置的胃切除粘膜抜去術を行つたが，十二指腸断端破裂を来した．失敗の最大原因は幽門附近に別にあつた潰瘍の存在を発見出来ずに粘膜抜去術を敢行し粘膜断端縫合がボロボロになつたためであるが，本例では術後の通過障害がなかつたために食物の漏出がなく，膵液，胆汁の逆流漏出が少なかつたために治癒せしめ得た．

京大外科第2講座の最近5年間の破裂例5例の中，2例は縫合の不手際で死亡，2例は輸出入脚の軸捻転による内圧亢進によるもので死亡，1例は術後通過障害がなく内容漏出が少なかつたもので治癒している．

第2例は，膵頭部に穿通し幽門狭窄を伴つた幽門潰瘍の形をとつたもので，手術は潰瘍面を一部残して約1/2胃切除を行い Billroth Ⅰ で吻合したが，吻合部後壁に縫合出来る組織を見失い，胃後壁漿膜と膵頭部後腹膜に密に結節縫合を行つてバリケードとし，吻合部後壁は胃全層と潰瘍面を辛うじて2針かけてよせ前壁は普通に縫合した．術後は通過障害なく1次的に治癒せしめ得た．

(9)　胸部食道全剔出術の経験

麻田　栄・板谷博之・武内敦郎
中村和夫

43才の女子で中部食道癌の患者に胸部食道全剔出を行つた．先ず胃を游離し次に右開胸にて容易に食道に達したが，大動脈との癒着は盲目的剝離を要し大出血を来した．大動脈の救急的止血にはボッツ氏大動脈鉗子は不便である．約1分間の大動脈弓下血流遮断では後障碍を認めなかつた．胸部食道全剔後，開胸時間短縮のため左胸壁皮下で食道・胃吻合を確実容易に行つたが稀に皮下トンネル内で可成り大きな皮下動脈出血を来す恐れもある．胃を遊離後癌部の剔出不能のときには上部食道と胃を吻合し癌部以下の食道と空腸等をつなぐ曠置手術が胃瘻造設よりも有利であろう．術後経過順調であつたが翌日喀痰による気道閉塞を防ぐため気管切開を試みたが術後頸部瀦血と気管の位置異常が起つていたので却つて窒息死を来した．この様な例では術後手術室で気管を露出確認しておくべきだと思つた．

追加　本庄一夫

別に特別の意見も小生にはありませんが，ギャーロックは特別の理由なく左開胸をいたしておりますが，メーヨー学派は右開胸をしております．それの方が食道剝離が容易であるし視野を充分得られるということでありますが，たゞ肝が邪魔するため右では開胸，開腹を行わねばならぬ不便があると申しておりました．

追加　麻田栄

上中部食道癌に対する食道切除に際しては右開胸の方がよいと思う．その理由は，

1)　操作が容易である．即ちV. azygos のみを切断，縦隔をひらけば全食道が容易に出しうる．

2)　右開胸でもつて Mediastinum 全般に亘り到達しうる．本例の如きは大動脈をつかんで止血しえた．

3)　游離した胃は右胸腔経由右頸部まで充分にもつて来る事が出来る．胃がとゞかないという事はない．

(10)　最近5ヶ年間の京大整形外科教室における先天性股脱の治療概要

赤星義彦・近藤茂・荻原一輝
小野村敏信・佐野耕三

昭和23年4月より28年3月迄の5ヶ年間に京大整形外科外来を訪れた1169名の先天性股脱患者に就いて，性，男女別，脱臼の程度，治療の種類（非観血的及び観血的治療類別）全治療期間，いわゆる missbehandelte L. c. c.，乳児および幼児の非観血的治療方式，非観血的整復後1年目における状態を各々整復年令別に統計的観察を行つたが，解剖学的治癒成績を向上させるためには，今後特に早期発見，早期治療の啓蒙に力を注ぐべき事及び観血的治療面に於いても，手術適応，手術法については積極的な検討の行わるべき余地のある事を述べた．